



島田一男 高木彬光集

日本推理小説大系 8 東都書房

日本推理小説大系第8巻

島田一男 高木彬光集

定価三八〇円

著者 島田一男 高木彬光

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三三一

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年九月二〇日第一刷

目次

島田一男

上を見るな 5

社会部記者 96

百十一万分の一 112

作並 124

高木彬光

刺青殺人事件 135

妖婦の宿 262

殺意 89

解説 中島河太郎 296

島田一男

上を見るな

1 記憶の中の女

約束の午前六時三十分、劍子の夫蛇田章次が自家用車を運転して私を迎えにやって来た。

——羽田国際空港までは約三十分のドライブである。福岡行き直行便の出発が午前七時三十分で、その二十分前にターミナル・オフィスに行かねばならないのだ。

航空会社の旅客専用のバスもあるが、これだと六時までには新橋日航事務所へ行かねばならない。とすると、家を出るのは、どうしても五時過ぎだ。

「——直接羽田へ行きましょう。わたしが車でお送りしますよ。御無理をお願いするのですから……」

蛇田章次の配慮は、大変有難かった。

なにしろ突然の九州行きである。旅の仕度も

あるし、助手の金丸京子へ書き残しておきたいこともある。時間は、十分でも二十分でもほしいところだ。

全く、つむじ風に吹きまわられるような慌ただしさだった。蛇田章次が始めてやってきたのが昨夜——それも九時を過ぎてからだ。しかも出し抜けに、蛇田章次夫妻の代理人として親族会議に出席するため、明朝の飛行機で九州へ行ってくれないかと言うのである。

私は刑事専門の弁護士だ。民事は殆んど扱ったことがない。第一、訴訟になるかどうかかわからぬ親族会議への代理出席なんて、全然畑違いだし、行く先きが九州は長崎県千々石町字蛇田と聞かされては、先ずごめんこうむりたいところだ。

ただ問題は、蛇田劍子である……。
この珍らしい名前を、私は十年前の大学時代から知っている。学友蛇田弓彦の従妹だ。弓彦の下宿には、可愛い少女が二人並んだ写真が飾ってあった。

「——大きい方が旗江、小さいのが劍子……。僕の従妹達だよ……」

弓彦は、貴公子然とした、秀才型の男だった。——このひとの眼と鼻をもらいたいわ……、カフエーの女給などから、よくそう言われるほど切れの長い眼と、形のいい鼻をもっていた。「いずれ、どちらかが君のフラウになるわけだな」

「叔父はね、それを希望しているんだよ。でも

僕はいやなんだ。劣性遺伝のパーセンテージは、父系結婚が一番高いからね」

「彼女達を、余り好きじゃないんだな」

「好きさ……。いや、可愛いと言った方が適切かな。妹に対する愛情だよ。おっとりとした旗江、勝ち気な劍子……。全然性格は違うが、実に仲がいいんだ。僕はね、学期休みには必ず帰郷する。実に楽しいんだよ、従妹達と暮らす日かが……」

そういつていた弓彦も、学徒出陣で応召した。歩兵部隊で、どこかの戦線へ持って行かれたっきり消息を絶っている。

「いや、弓彦君は帰還しましたよ」
「え、いつ!?」

これは初耳だった。私は思わず乗り出して蛇田章次の顔を見詰めた。

「かれこれ半月でしょう。ソ連から——」

「あー、先日の興安丸で？」

「そうです。で、今度の親族会議も、弓彦君達の帰還が原因なのですが……」

「弓彦君達？」

「ええ、大変、こみいってましてね。もし行って頂けるようなら、明朝までに、詳しく事情を書いて来ます……。実は、わたしは勤務の都合でどうしても行けず、劍子だけが出席することにしていました。その劍子が突然今朝から発熱しましてね」

「なぜ、私に？」

「劍子の意見です。弓彦君の親友の南郷さんが

弁護士をしていらっしやる筈だから、お願いしてみては……と、劍子が言い出したので、御無理を承知でお願いにあがったのですが……」

結局、私は承諾してしまつた。——劍子の願いを断わり切れなかつたのだ。久し振りに弓彦にも会いたかつたからだ。そして、何よりも、私も稼がねばならなかつたからだ。駆け出しの刑事弁護士なんて、余り金になる仕事ではない。助手の京子の給料も、ちよいと滞^{とど}まっている……。

——旧友に会えて、雲仙^{くもせん}が見物出来て、金になるんだから……。

そんなわけで、劍子が予約しておいた飛行機の座席で私が飛ぶことになつたのである。

明けたばかりの京浜国道を、五五年型のシボレーは、ピーッとタイヤを鳴らして走り続けた。

大森の工場街も、羽田の町もまだ眠つていたが、国際空港のターミナル・オフィスは既に一日の仕事を始めていた。

「——お早ようございます……」
食堂のサービス嬢が、香りの高いコーヒーとトーストをのせた盆を持って、私達とすれ違つて行つた。

「——お早ようございます……」
ネービー・ブルーの制服を着た女事務員が、愛想よく、しかも、いそがし気に私達を追い越して行く。

待合室の椅子も、食堂も、先きに旅客専用バ

スで着いたお客で満員だつた。

「ちよつと待って下さい。劍子の予約した座席を、あなたのお名前に変更して来ますから……」
虻田章次は、私を待たせてターミナルの事務室へ行つた。

私は、改札口へ行って飛行場を眺めた。——かつて、矢張り学徒出陣兵の一人として、航空隊へ入つたことのある私は、十年振りに、飛行場の懐かしい匂いを嗅いだのだ。

匂いは同じだつた。だが、色彩は違つていた。私が見て来た灰色の零戦や夜間戦闘機月光とは異り、赤白青と塗装も華やかな大旅客機が翼を並べている。一番手前にいるのが私達を乗せて飛ぶ日航機だろう。機首に日本文字が記入され、尾翼に日の丸が書いてある。

同じ日の丸をつけたちよつとばけな飛行機で、幾十人かの戦友が死んでしまつた。ここに翼をやすめている日航機は、日の丸こそつけているがアメリカ生れの貨機だ。やつとこの頃、日本人のパイロットも出来たとか新聞で読んだが、まだ殆んどはアメリカ人パイロットが操縦しているらしい。情けない話だ……。

「——どうも……、これをどうぞ……」
戻つて来た虻田章次が、薄青色の搭乗券と番号をつけた大きなセルロイド・カードを渡した。番号は二番である。

このカードが、飛行機に乗りこむ順番だと言るのである。つまり私は、二番に乗ることができるわけだ。

「まだ、二十分ありますなア……。劍子は、今朝になつても熱が下らないのですよ」

私は、この言葉の謎を解いた。——帰りたいのだ……。

「御心配ですなア。どうぞ、お引きとりになつて下さい」

「いや、そんなわけでは……」

「どうせ、行くのはわたし一人です。親族会議の代理出席の責任は果して来ます。報告書といっしょに、費用の精算書をお宅の方へ廻しますから」

「どうぞ、どうぞ……。では、お願いします。」

これが、昨夜お約束した事情の説明書です。飛行機の中でもお読み願えれば……」

「承知しました。奥さんよろしく」
私は中型のハトロン封筒を受取ると、すぐ視線を飛行場へ向けた。——最初からどうも余り好ましい男ではなかつた。それが、話しているうちに、段々口をきくのがわずらわしくなつてきた。

虻田章次は、一応の紳士である。洋服の着こなしもうまいし、自動車の運転も出来る。イングリッシュ・カットの六角形の眼鏡も、鼻下の小さな髭もキザっぽくはない。顔は角張つて、色は浅黒いが、これも見ようによつては健康の証拠と言えらるう。言葉使いも、丁寧なほうだ。

だが、どうも好きになれない。この男と話しているよりは、騒々しいプロペラの試動音を聞

いている方がいい。——ミッキー・マウスとドナルド・ダックのように、生れつき肌があわなのだろう……。

私はハトロシ封筒をポストン・バッグに放りこんで、折から着陸した銀白色の大旅客機を見物した。——ノースウェストのマニラ線だった。

やがて、日航福岡線のアナウンスが始まって、乗客は改札口付近に集った。

「——一番から五番まで、どうぞ……」

係員が、乗客を五人ずつ区切って飛行機へ案内する。一番の乗客はまだ来ていなかった。だから、私が最初にタラップを登り、翼に邪魔されることなく下界を見降せる最前列の窓ぎわの席をとることが出来た。——虻田章次が私にしてくれた一番いいことは、NO・2のカードをとってくれたことだけである……。

2 邪魔者が三人

四発DC4の飛行は素晴らしかった。——十分余りで大島上空に達し、ここから機首を西へ向けて真一文字に開門海峡を過ぎず。三時間三十分で福岡の板付飛行場へ着陸する予定である。

スチュワードがチューインガムを配って歩いた。天竜川が見える頃だった。

サンドイッチとスープが配られた。伊勢湾が見えている。

これでは、説明書を読んでいる時間がない。私は朝日の入る丸窓のカーテンを引いて、ハトロシ封筒から書類を引っ張り出した。

ポトリッと、白い角封が足許に落ちた。それには、虻田劍子の宛名と、弓彦の名が書いてあった。弓彦から劍子へ宛てた私信だ。別に赤インクで、——御参考までに劍子……と書いてある。これは私に宛てて劍子が書いたものである。私はず説明書の方から読むことにした。

——説明書は、薄手の野紙に、邦文タイプで印刷してあった。かなり長いものである。一体、なんのために、まるで議事録でもあるかのように、こんなものをタイプで打ったのである？ いずれにしても、虻田章次が私のためにこの書類を昨夜つくったとすれば、これは大変な努力を要したに違いない。

説明書は、次ぎのように二つの章に分けてあった。

一、虻田家の歴史 長崎県南高来郡千々石町字虻田なる虻田家は、遠く藤原秀郷に起り、藤原家九代季家九州竜造寺家を創設、竜造寺家五代家政の次第一政、島原半島虻田ノ津に移って、ここに始めて虻田の姓が起った。寛永十四年、雲仙山頂の大乗院満明寺に切支丹の信徒乱入、一山の僧坊一千余坊焼失して混乱したが、虻田家二代一重郎党を率いて雲仙に馳せ登り大功あり、よって幕府より虻田ノ

津並に近郷六ヶ村五百余町歩を与えられた。以来、島原藩主松平家より客分を以て遇せられ、明治維新までは代々虻田の大夫と呼ばれていた。虻田家の所領は、北に海拔四〇〇メートルの猿丸山あり、南は千々石湾に臨み、

夏涼冬暖、島原半島中屈指の極楽郷である。また、猿丸山を廻って国道が走り、長崎へ六〇キロ、諫早へ二七キロ、雲仙温泉郷へ一五キロ、島原へ四〇キロ、島原半島交通の要地である。今次終戦後に農地改革により、虻田家の農耕地は一部小作人に解放されたが、なお虻田ノ津始め旧所領内の町村の全宅地、猿丸山の七割、鳩穴の鼻、塔ノ崎、六ツ木浜、三角鼻の四漁場は虻田家の所有となつてゐる。ただし、六ツ木浜沖一〇〇〇メートルより猿丸山中腹に互つて、目下海上警備隊砲撃訓練地として接収の計画あり、虻田家はもとより、在任農民漁民一丸となつて反対闘争中である。当主一角齋は、虻田家十六代に当り、先代村彦の実弟である。

一、虻田家の現状 当主一角齋は、本年六十四歳。二度娶り、両度共妻に先立たれてゐる。先妻カネとの間に二女あり、姉旗江は本年二十九歳、妹劍子は二十五歳である。また、後妻小夜は一女をもうけた。本年十八歳の三輪子である。この外、同家には、先代村彦の遺児弓彦(三十二歳)、後妻小夜の連れ子寒三郎(三十一歳)があり、更に、旗江の夫末次郎(二十八歳)永次郎の兄久一郎(三十二

歳)、及び旗江と永次郎の子衣子(五歳)が同居している。劍子のみが、同家を離れ、小生(虻田章次)と東京に在るわけである。

さて、この一族各個人の相互関係につき、小生は、貴下に先入観を与えざるため、第三者の立場より、冷静に記述を進めたいと努力するものである。

第一に、虻田家第十七代を相続するものは誰か? 一角斎老人は、実兄村彦死亡当時遺児弓彦幼少のため、計らずも虻田家十六代となったが、十七代は当然弓彦へ譲るべきものと考えている。然るに、旗江の夫永次郎は、旗江との結婚の条件に、虻田家十七代の約束ありとして、弓彦の相続には強く反対している。

永次郎の反対には次ぎの如き事情があり、親族中にはこれを支持するものも多いのである。即ち、旗江は再婚である。しかも前夫は、永次郎の兄久一郎であった。戦時中、弓彦、久一郎、及び後妻小夜の連れ子寒三郎は、相ついで応召出征し、終戦と同時に何れも消息を絶ち、その後弓彦と久一郎とは戦死の公報が虻田家へ送られて来た。ここに於て一角斎老人は、虻田家相続を条件として永次郎を説き、^嫁であり、年上である旗江と強引に結婚させたのであった。しかるに、以来六ヵ年、衣子なる一女までもうけた今日、突如として弓彦、久一郎、並に寒三郎の三名が同一送還船によって帰還したのである。一角

斎老人は生きている限り弓彦が十七代たるべきものと考え、永次郎はこれを違約なりと考える。ここに問題があるわけである。更に、旗江をめぐる久一郎と永次郎の関係もまた複雑である。久一郎は、実弟かつての妻旗江の幸せを祈って身を引くべきか、永次郎は抑留生活十年の苦惱にひしがれた兄に旗江を返すべきか、その場合幼き衣子をいかに処置すべきか? 一角斎老人はこの解決に苦慮している。老人は、寒三郎についても苦慮している。寒三郎は、傷害罪にて長崎刑務所に服役中、獄中より出征したものである。彼の性格については、先入主となることを恐れ言及を避けるが、一角斎老人は自らの不徳の致すところと考え、寒三郎の善導を念願していたことは虻田ノ津はもとより、近郷周知の事実である。抑留十年の試験を経た寒三郎が如何なる性格の変化を示しているかは、詳かではないが、封建的気風濃厚なる島原半島に於ては、いままなお前科者が白眼視されていることもまた事実である。

最後に、一角斎老人自身、大なる悩みを持っている。それは、落下物恐怖症なる一種のノイローゼである。常に、頭上より何ものかが落下してくるとの恐怖におびえ、ここ数年來一歩も屋外に出ず、鉄筋コンクリートにて固めた屋根の下に生活している。従って健康は衰え、今後数年の生命は、いかなる名医も保証し得ざる状態である。そのことは老人自ら

もよく承知し、それが故に、相続問題、旗江の結婚問題等も、早急に解決したいと望んでいる次第である。

以上が虻田家の現況であるが、蛇足ながら小生並に劍子についても触れておくべきである。小生の両親は島原半島下津の出身。明治末年移民としてハワイに渡り、小生はヒロ市外の農地で生れた。ハワイ大学在学中、米航空部隊士官となり、板付に駐留したが、当時、福岡の女子大学生であった劍子と知り合い、除隊後、米国の輸送関係会社に勤務、東京駐在となるに及んで、正式に結婚したものである。なお、結婚にあたって、一角斎老人の希望により、養子縁組とし、小生が虻田家の一員となるのが条件であり、目下米政府に対し手続き中である。右の如き事情により、今回の親族会議の性質も自ら明らかなることと考える。当然、相続問題と旗江の結婚が中心議題となるものと推測されるが、これに対する小生と劍子の投票権は、貴下の良識に一任し、一族全員の幸福を願うものである。もし、財産分与に関する議題が出た場合は、法律に定めるところに基き、劍子の権利はこれを主張するも、小生は何物をも得たいとは考えていないことを明らかにしておく。貴下の御旅行の愉快ならんことを祈りつつ……以上

長い説明書は終った。——私は説明書の途中

から憂鬱になっていたのだが、読み終ると同時に、こんなことなら引受けるのではなかったと思つた。

煙草を点けて、カーテンをあけると、眼下に瀬戸内海の島々が寶石のよう散らばっていた。

美しき日本の山河よ！ それに引き替え、日本人はなんだってこんな悲しみを背負わなければならぬのだから……。

生きていた英霊……、何十度となく新聞に出たことがらだ。

二人夫、二人妻の悲劇……。日本国中、どこにでも転がっている。

相統問題……、封建主義が民主主義になつたつて、この問題が簡単に片づくものか。

九州くんだりまで飛ばず、日比谷の弁護士会館で番茶でもすすつて、麻葉取締法違反か私文書偽造の弁護でもやつての方がよかつた。それでも助手の給料くらいは稼げただろう。それにしても、虻田章次つて男は、こんな悲しい人間の組合せを、よくもサラサラと書き飛ばしたものだ。先入主がどうの、予備知識がこうのとは言っているが、引っぱり出された大勢の男女に対して、一片の同情すらも感じられない冷酷な文章だ。きつと、この男なら、小犬を跳ね飛ばしても、口笛を吹いて自動車運転して行くだろう……。

私は煙草を揉み消してから、弓彦の手紙をとりあげた。

——先日是有難う。舞鶴棧橋で君を見た時は本当に嬉しかった。夢ではない。やっぱり日本へ帰つて来たんだ……、僕は君の顔を見て、日本の山々をあらためて見廻したよ……。

弓彦の手紙は、こんな文句で始つていた。——こいつは頂ける。日本人の文章は、こう来なくつちやいけない。

劍子ちゃん

だが僕はいま、帰つて来なかつた方がよかつたのじゃないかと思つている。虻田家を僕に相統させようという叔父さんのお気持ちは嬉しいが、同時に迷惑なんだ。

僕は虻田家の十七代目になるより、九州上古史の研究に打ちこみ、十余年の空白を取り戻したい。しかし、その願いを叔父さんに話しても、叔父さんは僕が遠慮している、一族の平和のために我慢をしようとしていると解釈するようだ。僕が真剣になればなるほど、叔父さんも、相統せよといひはる。そんな時には決して、叔父さんの病室の外で永次郎君が立ち聞きしているのだよ。僕は、永次郎君を不幸にしたようだ。

久一郎君も、帰らない方がよかつたかもしれない。彼は旗江さんを信じていたのだよ。ナホトカの収容所で、僕達三人は偶然いっしょになった。それから僕と寒三郎君は、毎日、幾時間も旗江さんの思い出を聞かされたもの

だ。帰つて来てからの久一郎君の失望、永次郎君の警戒は見るに堪えない。それにも増して旗江さんの悲痛な表情は、まことに眼を蔽わせるものがある。——弓彦兄さん、あたしの夫は、誰なんでしょう……。

旗江さんからそう訊ねられたことがある。僕は答えられなかつた。

寒三郎君が、また酒を飲んで暴れだした。——面白くねエ、面白くねエ……。彼はねじり鉢巻で歩き廻る。人々は、それをジーンと

軽蔑の眼で見ているのだ。ナホトカで会つた時の寒三郎君は、まるッきり人が変つていた。——帰つたら、出なおす積りだよ。まだ

三十一だもの、これからだつてやれるさ……、それが口癖の寒三郎君だったが……。十余年間寒三郎君を鍛えた大陸の風雪も、人々の十五日間の白眼には及ばなかつたようだ。

結局僕達は三人とも邪魔者なんだ。僻みでこんな言葉を使うのじゃない。僕は現実を見詰めて、こう結論するのだ。僕達は、帰らな

きやよかつた。大陸にだつて、生きて行く場所がないわけじゃなかつたのだから……。ただ、やたらに日本が恋しくて、君達に会いたくつて帰つて来たのだが……。

せめてもの救いは、君が幸せになつてるところだよ。恋愛結婚だつてね。古めかしい家風を誇りとしている虻田家にとっては、特筆すべき出来事だね。叔父さんから聞いたよ、君

が章次君との結婚を希望した時、——家名を

恥かしめぬ女になれ……、叔父さんは、ただ一言、そう言っただけだつてね。叔父さんらしいな……。

近く親族会議をやるそうだ。当然君達も来てくれるだろうね？ 楽しみにしているよ。御土産は、なにもいらぬ。君達夫婦の元気で明るい顔さえ見れば……。

私は手紙を読み終つて眼を閉じた。——試験の時、難問にぶつかると、右の耳たぶをひっぱつて片眼をつぶるのが弓彦の癖だった。帰還以来、いろんな問題に出くわし、耳たぶはひっぱりどおし、片眼はつむりッ放しだろう……。

「——みなさま、座席のベルトをお締め下さい……」

スチュワードスのアナウンスが始まった。

——飛行機は、板付飛行場へ着陸態勢をとつている。

「——本日の機長はピーター・マックガイヤー。副操縦士ジョージ・シモンズ。スチュワードスは永田ヨシ子と森本春江でございます。この後の御搭乗をお待ち致しております。おつかれさまでございました……」

飛行機は、滑走路に車輪をバウンドさせていた。米人機長だが、心憎いばかり正確な操縦振りだった。

3 地峠の黒い手

飛行会社の旅客専用バスで、埃っぽい道を板付から福岡市内に入り、博多駅前に降りたのは十二時過ぎだった。——飛行機は早くて来たが、専用バスはのろくつて、くたびれる。

列車の発着時間を調べると、長崎行きの急行雲仙号が出たばかりだ。次ぎは、十三時五十分の普通列車……。長崎着が二十時だ。東京、福岡間一千余キロを三時間で飛び、福岡、長崎間一八〇キロを六時間かかつて行く。変な気持ちだ。

私は二等乗車券を買つて、待合室のかたいベンチに腰を降した。

と……、空いている前のベンチに、十七八の若い娘が、ヒダの多いスカートをフワリッと拡げて腰を降し、ヒョイト、脚を組んだ。

真ッ正面なので、上に重ねた右脚の奥が見える。長いストッキングの切れ目が、赤いガーターに締められてキューツとくびれているのまで見える。

なかなかいい脚だ。勿論、まだ生娘だろうが、どうして、立派な肉置きだよ……。

「——あの……、南郷先生じゃございませんか？」

娘が私の顔を見て、ニコリ笑つた。——抱いていた卵から蛇が顔を出した時の雌鳥の驚きを私は味わつた……。

「そう……、南郷ですが……」

「やっぱり……。あたし、すぐわかりましたわ、東京の方は、女の子が前に坐つて脚を組んでも眼をそらさないから」

「御挨拶ですなア。しかし、東京だとわかつて、名前まではわからない筈ですよ。はは！、あなたはマダム・ファイイの高弟ですかな？」

「あらなんですの、マダム・ファイイ？」

「パリの裏町に住む、妖怪の如きジブシー——の千里眼婆アですよ」

「いいえ、あたし、パリどころか、東京さえも知りませんの。でも、東京から、電報を貰いましたわ、——南郷弁護士、飛行機でたつた、屋博多駅にて会え」

「これはこれは……」

私は立ち上つて、あらためて帽子をとつた。

「虻田三輪子さんですね？」

「御名答！ マダム・ファイイのための乾杯は、汽車の中でいたしましょう」

「あなたも、長崎へ？」

「ええ、召集令が来しましたのよ、親族会議の……。おかげで、窮屈な寄宿舎から当分解放されますわ」

「なる程、大学ですか？ 劍子さんと同じ学校？」

「ええ……。極めて封建的な良妻賢母養成学校……。劍姉さんが章次兄さんとのロマンスを拾つたなんて、いまだに奇蹟として学校雀の語り草ですわ。おかげで妹のあたしまで舎監先生の要注意人物……。大変迷惑していますのよ」

冗談じゃない。中年の男の前で脚が組める女学生なんて、どんな学校でもマークされること

だろう。

「虻田ノ津まで、お供しますわ」

「有難いですなア。実は突然のことで、地理はわからず、少々弱っていたところですよ」

「つまらないところでですけど、お魚だけはすごくおいしいんです……。今夜は長崎で泊って、明日のお昼から、ハイヤーを飛ばしましょう。長崎の夜景は素晴らしいですわ。それから、大村湾と有明海と千々石湾に挟まれた三角地峡の眺めも雄大ですわ」

「これは大変楽しい旅になりそうですねア。三輪子さんをガイドにつけてくれた虻田章次氏に感謝しますよ」

「あら……。あの電報、章次兄さんからかしら？ あたし、劍姉さんからだと思っていましてのよ」

「劍子さんは、昨日から発熱で、寝たっきりですよ。だから僕が代理で来たんです」

「まア……。でも——」

長崎行きの改札が始まったので、私達も立ち上った。

二等車は、意外に混んでいた。とても、マダム・ファイイのための乾杯どころではない。三輪子とは離れ離れで、席をとるのがやっとだった。

ハワイか、ブラジル辺りへ行った移民の成功者らしい日本人の観光団体が乗っているのだ。——どの顔にも、陽焼けた苦勞の皺が刻まれている。

派手な格子縞の変わりチョッキに、ツバの広い緑色のシャツポなんかかぶった爺さまが、節くれ立った指にデカイ金指環なんか光らし、

——ヘーイ、ユー……。

——オーウ、ゴッデム……。

なんてやっている。子供が玩具を買ったようにはしゃぎ方だ。もの凄く騒々しい。が……。まアそれは、幾十年振りかて錦を飾った人々の喜びの発露として我慢するとして、どうにも辛棒できないのが、どの口にも啞えられている安葉巻きの匂いだ。

車内には青ッぽい煙が、煙幕の如くモワッと棚引いている。私は幾度も、空気を吸いにステップへ出なければならなかった。

驚いたことに、三輪子はこの煙草の中で平然たるものだ。それどころか、列車が鳥栖を過ぎる頃には、すっかり移民一世諸氏と仲よくなり、一座の花形(はながた)の如き位置にさえ就いているようだ。

私は殆んどステップで過ごすようになった。

——佐賀で買った駅弁を、遠浅の有明海を眺めながらモソモソ喰ったのもステップに腰を掛けただ。

二等車の乗降は殆んどなかった。佐世保への分岐点肥前山口を過ぎると、私は覚悟を決めた。肥前山口で降りない以上、団体の目的地は長崎だ。とすれば、この列車に乗っている限り、煙霧地獄からは解放されない。三等も満員だ。寧ろ、ステップにおみこしを据えていた方

が賢明である。

私は一度二等車に引き返し、網柵のポスト・バッグからタオルをとり出し、一度三輪子へ片眼をつむってから、またステップへ戻った。

ステップに坐り、タオルをバンドに通してステップ脇の手掛りへ結びつける……。こうしておけば、どんなに列車がブレても転落の心配はないわけだ。

やがて、有明海が狭まり、雲仙の山塊が黒々と左側から迫って来た。——明日は、あの山の麓に在るわけである……。

列車は、暗くなって、諫早を通過した。これからは上り勾配で、スピードも落ちる。線路添いのこんもりとした丸い灌木は、どうやら蜜柑のようである。

星が美しかった。澄み切った筑肥海域の群青の夜空に、乳白色に輝やいている星座の姿は、貝殻を散りばめた螺鈿の塗り物に似ている。ゆくりなくも、頼山陽の詩が思い出された。——

雲か山か……の第四句、——太白船にあたりて月よりも明かなり……のところだ。山陽が天草灘に泊ったのも、こんな晴れた夜だったのだらう。

「——わッ！」

仰向いて星を眺めていた私は、出し抜けに、ステップからツンのめるのを覚えた。

夢中で手掛りを掴んだ時には、足は宙に浮いていた。

「——ばッ馬鹿ッ！ な、なにをするんだッ」
私は列車にぶら下って叫んでいた。——列車の動揺で落ちたのではない。何者かに突き飛ばされたのだ。私は、背中を押しした二つの手のひらを感じとっている。

幸い私は、タオルで体を列車につないでいた。もう一つ幸運にも、列車はスピードを落していた。この二つの僥倖に恵まれなかったなれば、私は今頃、冷たいレールの傍らで、星の光を浴び、血へ道を吐いていたかもしれないのだ。

私は、漸くのことで、ステップに匍かい上った。——勿論、辺りに人影は見えない。

二等車へ入ってみた。三輪子が、老人団体の前で、黒田節を歌っていた。三輪子の悪戯ではなかったようだ。

だから尚さら、私はゾツとした。——星を仰いでいた私が、正体不明の何者かから突き落されたことは間違いないのだから……。

4 宿命の男達

浦上うらがみを過ぎた。次が長崎だ。

「——難かしいお顔……」

網棚からポストン・バッグをおろして下車の用意をしている私の顔を三輪子がのぞきこんだ。

——危く天国行きの片道切符を買わされかけたのだもの、機嫌がよかろう筈はないのだ……。

「わかっていましたわ。葉巻きの匂いでしょ。フフフ、あたし、女のくせに平気……」
私はさっきの出来事を三輪子には話さず、黙っていた。

ダイヤより五分遅れて、列車が終着駅長崎に到着すると、私はまっ先きに飛び降りて、ホームに突ッ立った。

二等車は機関車の次ぎ、あとは三等車である。改札口は、機関車から三十メートルほど先にある。だから、列車を降りた乗客は、全部私の前を通って改札口へ行かねばならない。

私は、ゾロゾロと続く人の流れを見詰めていた。——それらしい人間……、私の背中へ手をかけたやつを、発見してやりたかったのである。

だがそれは、綿の中から糸屑をさがし出すのと同じくらい難しかった。

「——どうなすったの、先生」

怪訝けげんそうな顔をする三輪子といっしょに、一番あとから改札口を出ると、背の高い男が笑顔で手を振っていた。

「あら、弓彦さん！」

三輪子の声に、私は茫然と男の顔を眺めた。

——力のない悲しげな眼だ。かつては女達から欲しいとまで言われた美しい眼だったのに……。頬が、ナイフで削いだように瘦けて、額が禿かげ上っている。まだ三十二歳の弓彦が……。

「——変ったなア！」

これが、十余年振りで会った友人への最初の挨拶だった。

「君は、ちっとも変らない……」
弓彦が、私の手を握った。昔と変らぬ声だった。静かな含み声である。

「苦勞したんだなア。三輪子さんがいなかったら、君だとわからなかっただろう」

「それほどづらくはなかったよ。労働ではかなり鍛えられたが、精神的な悩みはなかった。僕は諦めていたから……。寧ろ、ナホトカへ着いてからの方が奇き々きしたよ。帰還船がいつ来るか、いつ来るかってねエ……。三輪ちゃんとは、福岡から？」

「うん、博多駅でいっしょになった。勿論初対面だが、すぐ僕だとわかったそうさ。東京の男はジロジロと女の子の脚を見るからすぐわかるんだって……」

三輪子が、グンと、私の脇腹を突いている。「でも、三輪ちゃんがいっしょでよかった。僕は君が一人で困っているだろうと思って……」

「東京から報らせがあったんだね」
「章次君から叔父死に電報でね、——われ等の代理人、弁護士南郷二郎氏、今朝飛行機でた……。意外だったが、嬉しかった」

「劍子さんが急病でね、僕が来ることになったんだ。劍子さんの頼みだし、君にも会いたいし……」

「大歓迎だよ、少なくとも僕は……」
私はもう一度弓彦を見詰めた。

「ここから東京へ引き返した方がよさそうだ」

な、劍子さんには悪いが……」
 「いや、君のような第三者の発言が案外必要かもしれない……。さて、どうするか？」

弓彦は三輪子へ顔を向けた——。

「いまからハイヤーを飛ばせば、十時前には家に着けるが……。食事はまだなんだろう？」

「うん、あたしはまだよ。先生は駅弁をたべていらっしたけど」

——なんて女だろう……。団体の老人達から取り巻かれていたくせに、そんなことまで知っている……。時々、ステップをのぞいて、私の様子を見ていたのだろう。

とすると、あの突き落しは、やっぱり三輪子の危険な悪戯いたづらだろうか？

「弓彦さん、あたし南郷先生に、長崎の夜景をおみせする約束をしたのよ。家に帰るの、明日にしましうよ」

「そうだね……。じゃ、ちょっと家へ報らせておこう」

「いいわよ、そんなことしなくたって」

「そうはいかないよ。南郷君が諫早で降りるか、長崎まで乗るかわからなかったの、永次郎君が諫早駅に行っているんだ」

「あらそう……。じゃ、報らさないと悪いわねエ」

弓彦は私を待たせて、電話をかけに行った。

「虻田へは、諫早からも行けるのですか？」

「あら、知らないんですか？ 長崎から雲仙を越えて島原まで国道が走っていますよ。その

途中に、諫早や虻田ノ津がありますの。それから、橋中佐が生れた小倉や、小浜温泉も国道添いですわ」

「じゃ、諫早で降りた方が虻田へ近いわけだ」

「だって、ここまで来て長崎を見ないなんて詰らないじゃありませんか。お帰りには雲仙へ行って、島原へ出て、船で有明海を渡って熊本に泊って——」

「そんな旅費を依頼者の章次君が出してくれればいいんですけどねエ」

「ウフフ、わからないわねエ、章次兄さんケチだから……。劍姉さん、どうしてあんなひとと結婚したんだろう？ 弓彦兄さんの奥さんになればいいのに、好きだったのだから……」

「従兄妹じゃありませんか」

「平気よ。断種すればいいんだわ」

「え？」

「問題は優生学上のことでしょ。従兄妹どうしが結婚すると劣性遺伝すると言うなら、子供を産まなきゃいいんじゃないか。簡単な外科手術で済むことですわ」

私は啞然として、時の流れを痛感した。——わが女房などは、三十の声を聞いてなお産科医の診察を恥かかしている……。

弓彦が戻って来た。——さっきより一層悲しげな顔に見える。

「連絡とれた？」

「三輪子があらずねた」

「うん……。永次郎君は、まだ帰っていないかっ

た」

「電話に、誰が出た？ 旗姉さん？」

「いや」

「久一郎兄さん」

「婆アやだ……。水明荘に宿をとったよ」

弓彦は三輪子の質問を逃げるように、タクシイを呼んだ。

車は、幾つかの橋と尖った天守堂の屋根下を走り、新開地のように明るい商店街を抜けて、石畳の坂を登り続けた。

数寄屋造りの洒落た旅館水明荘が、坂の突きあたりにあった。

二階の座敷に立つと、町の灯に囲まれた巾着型の長崎港をひと目で見渡すことができる。

「——先生、どこを御案内しましょうか？」

食事のあとで、三輪子があらずねた。

「長崎で見たいのは丸山の女郎屋」

「おひとりで、どうぞ……。あたし、高校のお友達のとこへ行ってきました」

三輪子は車を呼んで出て行った。

弓彦と私は、縁側に椅子を並べて夜の町を見おろした。

「僕はソ連の収容所にいるあいだに、幾度も長崎の町の夢を見たよ。眼が醒めて、あの町をもう一度眺めることが出来るだろうか……と思うと、やっぱり悲しかった」

「ところが、いまは帰って来なきやよかったと思っている……。君から劍子さんに宛てた手紙を読んだよ」

「そう……。誰かが不幸になるんだからねエ。僕が虻田家を相続すれば、永次郎君が不幸になる」

「飛び出しやいいじゃないか。なにもかも捨てて」

「僕が不幸になる……と、叔父は考えているんだ。そんなふうを考える叔父も気の毒だよ。また、旗江にしても不幸だ。久一郎君に帰るか、永次郎君のふところに止まるか……」

「旗江さんは、どちらを愛しているんだね？」

「愛情の問題じゃないんだ、わが虻田家に於てはね……。虻田一角斎の長女である旗江は、父親の選んだ男を夫にしなければならなかったのだよ。これは、僕だけが知っていることだが、十年前に、旗江に自由に夫を選ばしたら、寒三郎君の妻になりたいと言ったと思うよ」

「なる程……。だから寒三郎君がグレ出したのか？」

「いや、彼は中学時代から、かなり焼け糞な男だった。叔母——叔父の後妻で小夜というひとだが、この叔母が寒三郎を連れて虻田家のひとになった。寒三郎君は、自分の母が叔父や旗江、劍子の姉妹に横どりされたような気がしたのだ」

「子供心にねエ」

「うん……、小学校の頃は、陰気でヒネクれていた。中学に入ると、手のつけられない暴れン坊になった。中学三年の時、ジャック・ナイフで、上級生を刺したこともある。叔父は大学へ

やる積りだったが、本人は勝手に長崎の造船所に勤めた。それからは喧嘩と博奕とで、年中警察沙汰だ。叔父は、その度に長崎へ出て来て、寒三郎君を貰い下げた。一度も文句を言ったことがない。そんな叔父を寒三郎君は、義理でしてゐるんだ、偽善者だと罵つたものだよ」

小さな汽艇が、前照燈を光らせて、長崎港を南から北へ横切つて行つた。

「あの船の着いたところが、造船所なんだ、寒三郎君が働いていた……。その上に国際墓地があつてね、長崎名所の一つだよ」

弓彦は煙草を点けた。二三服すると、火玉を拵指の爪先きで落し、残つた短い煙草を耳に挿んだ。——煙草の不自由な収容所で身についた悲しい習慣であるう……。

「そんな糞ッばちな寒三郎君だが、不思議に女のいざこざだけはなかつた。僕にはわかるんだ、彼の気持ちがある……」

「旗江さんを愛していたんだね」

「うん……、そのくせ旗江も寒三郎君も、自分の気持ちを押し殺しちゃつた。恐らく、手を握り合つたこともないだろう……。僕は劍子への手紙に、——寒三郎君がまたグレ出した、抑留生活十年の試験も、郷里の人々の十五日間の白眼視に崩れた……と書いたが、その他に、旗江が永次郎君の妻になつてたことも一つの原因だと僕は考えている。久一郎君の時には黙つて旗江から身を引いた寒三郎君も、永次郎君にはゆずれない」

「そんな理由があるのか？」

弓彦は、どうにもやり切れないと言つた表情で、飛び上つた額を押さえた——。

「永次郎君も、連れ子なんだよ、一種の」

「——と言ふと？」

「三十年近く前に、大陸で日華兩軍がぶつつかつた。濟南事変と言ふやつだよ。永次郎君の実父はその時戦死したが、永次郎君はまだお母さんの胎内にいた。しかも不幸なことに、両親は正式に結婚していなかったんだ。それで僕の叔父の一角斎が、当時妻を失ひ、子供を三四人抱えて困っている久一郎君のお父さんのところへ、世話をした。永次郎君は、久一郎君の家で産れ、籍も入っているが、血はつながっていない」

「田舎では、そういうやりくりが多いんだね」

「特に他国者を嫌う九州ではねエ……。ただ、寒三郎君の場合、同じような連れ子の永次郎君が旗江の夫になり、更に虻田家の十七代になるなんて、それでは自分はどうしてくれるんだと言いたいわけだ」

「僻みだな」

「と、だけは言い切れないものがあるのだよ。死んだ小夜と言う叔母は、——お前はお世話になつてゐるんだから、遠慮をしなさい……。遠慮をしなさいと言つて寒三郎君を育てたんだ。だから、僕や旗江、劍子にはもとより、異父妹である三輪子に対しても寒三郎君は、一歩も二歩もゆずれない。自然内攻する。外へ出て暴れ